

熊本大学永青文庫セミナー

手紙からみた細川重賢の交遊抄

川口 恭子

細川重賢（1720～1785）は部屋住みの身であったが、兄宗孝の急逝により、細川家第8代藩主となった。

当時、藩財政は疲弊の極にあつたので、堀平太左衛門勝名を大奉行に任命して、いわゆる「宝暦の改革」を行った。藩校「時習館」・医学校「再春館」の創設、「刑法草書」の制定、行政機構改革、産業の振興等々を行い、これが成功し、中興の名君としてその名はよく知られているところである。

今回は『重賢公御代 御代筆扣』（永青文庫蔵）という重賢の私信を記録した史料により、その交遊の様子をみてみた。

「代筆」とは、主君の意をうけて右筆（書き役）が書いたものである。各所に訂正の朱書も記入されている。

諸大名、大名の嗣子、幕府関係者等70人に宛てられた600通の手紙の記録である。

時あたかも「博物学」盛行の時代であった。

動植物の「写生帖」は、『毛介綺煥』、『昆虫胥化図』、『艸木生写』等々数多くのものが永青文庫に所蔵されているが、他の諸大名も同様に持っていて、互いに貸借を行っているのである。

珍禽の図書、鳥の絵、『蟲豸図』、『奇獣図彙』、『蛇図』等々の貸借をしている。

植物も、久木野村住吉山の「花蘭」や熊本・久住山にある「久住梅」を所望されたり、犬山城主成瀬氏からは「宮重大根」の種をもらったりしている。これは熊本にもたらされ、二、三ヶ所に植え付けられた。

鳥類もかなりの種類のもが屋敷で飼われていたようで、珍しいものを交換している。

俳名での手紙のやり取りも行われている。重賢の俳諧は「江戸座」の点取り俳諧といわれるもので、連衆・点者の名前が俳名で書かれている。その他、能・馬・茶・書物等々、当時の人々の関心事が窺えて楽しい。

かわぐちやすこ
附属図書館客員教授



重賢公御代 御代筆扣

表紙の言葉

今号は熊本城二ノ丸公園の熊本
県立美術館の外観（玄関）です。